

「分かった！」感動が 人に伝えたくなる原動力。 表現することでも考える力も育つ

表現力の育成に注力する学校が増えているが、「表現させることが目的になっている」というような課題も顕在化している。表現力を高めるためには、どのような指導がポイントになるのだろうか。思考力や表現力を高めるための研究を進める稲城市立稲城第七小学校の味村和行校長と、研究を支援するベネッセ教育総合研究所初等中等教育研究室の八木義弘顧問に話を聞いた。

●子どもたちの表現力について

人前で話すのは得意でも 表現力の育ちには課題

——新課程になり、表現する力が高まっているという調査結果（図1）がある一方で、課題もあるようです（図2）。先生方が子どもたちとかわる中で、表現力は十分に育っていると感じられているでしょうか。

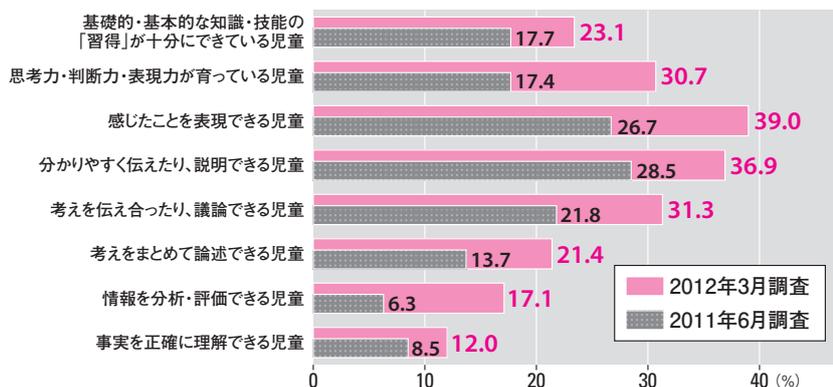
味村 自分の考えや思いを伝える力が表現力だとすれば、課題は多いと感じます。家族が多かった時代は、小さな子どもでも、自分で主張しなければ困った事態になっていたよう

に思います。しかし、今の子どもは、小さい時から保護者に細かく指図をされ、何も話さなくても意をくんで応えてくれることに慣れていきます。表現力は鍛えないと育たないばかりか、衰えてしまうものです。子どもが自分の思いを伝える場面が減っていることが、表現力に課題のある背景の1つだと考えます。

八木 保護者が先回りして、手や口を出してしまうことは多いと思います。例えば、雨が降りそうな時、欧米の保護者は天気予報の情報だけを伝え、傘を持っていくかどうかは子どもの判断に委ねると聞きました。一方、日本では、「傘を持っていきなさい」と子ども

図1 新課程の実施後の子どもの変化

Q. 新学習指導要領の実施によって、児童はどのように変わってきていると思いますか



*「増えた」の%

出典／2011年6月調査：ベネッセ教育総合研究所「小学校 新教育課程に関する教員調査」（全国の公立小学校教員868人対象）、2012年3月調査：ベネッセ教育総合研究所「小学校 新教育課程に関する教員調査—2011年度末調査—」（全国の公立小学校教員515人対象）、調査対象は各調査で異なる。

「感じたことを表現できる児童」が「増えた」と感じる先生は、新課程全面实施初年度の3月で約4割に達している。また、全ての項目で初年度6月に比べて3月の方が「増えた」の比率が高い。同調査では、「習得」を心がけた指導と併せて、「言語活動」（特に国語）と「活用」（特に算数）への心掛けも行われていることが明らかになっており、先生方の意識的な指導により、子どもたちに少しずつ思考力・判断力・表現力が育ってきているようだ。

ベネッセ教育総合研究所
初等中等教育研究室 研究員 橋本尚美

自ら表現したくなる授業づくり

東京都稲城市立稲城第七小学校校長
味村和行

みむら・かずゆき◎東京都公立小学校教諭、大田区立大森第三小学校教頭、品川区立八潮南小学校校長などを経て現職。
稲城市立稲城第七小学校◎市の教育研究推進校の指定を受け、「根拠をもって説明できる児童の育成」思考力・表現力を育てる授業の追究」として主に算数の研究を進める。児童数427人。



ベネッセ教育総合研究所
初等中等教育研究室顧問

八木義弘

やぎ・よしひろ◎元東京都公立小学校校長。東京都教育委員会指導主事、東京都算数教育研究会会長、大学講師を歴任するなど小学校教育をリードしてきた、算数教育の第一人者。現在、「新しい算数教育研究会」常任理事も務める。

に指示してしまいがちです。何事においても、大人がそのようにしてしまうと、指示待ちの姿勢が身に付いてしまい、自分の思いや考えを表現する力は付いていかないと考えられます。

ただ、今の子どもたちを見ていると、人前に出ることは抵抗感があまりないようにです。例えば、遠足のバスの中

でカラオケを歌いたがる子どもは、昔は珍しかったのですが、今はマイクの奪い合いです。その点は変わってきていると思います。

しかし、多弁だから表現力が身に付いているとはいえません。肝心の表現する内容が、「良い悪い」や「好き嫌い」といった結論だけで、理由や根拠の説明が抜けてしまう子どもが少なくないようです。また、相手の話を聞かず、自分の言いたいことばかりを話そうとする姿も気になります。そのようなことを考え併せると、広い意味での表現力は育っているとは言えないと思います。

図2 教師が感じる子どもの表現力と指導に関する課題

子ども自身の課題

- 自分の思いや考えを持っていても、それを相手に伝えることが苦手
- そもそも表現する意欲が乏しく、自信のない様子がある
- 覚えたことや練習したことは発表できても、友だちの意見をまとめて発表したり交流したりできない

指導の課題

- 教師によって「表現力」の捉え方にばらつきがある
- 教師に「何をどう表現させればよいのか」の共通理解がなく、発表させて終わりなど、表現することが目的化してしまっている
- 教師の話を丁寧にすると長くなってしまい、子どもが表現する場面が少ない
- 「間違えてもいい」という学級の雰囲気づくりが出来ていない

保護者の課題

- テレビやゲームなどに時間が割かれることで、家庭での親子の会話が少なく、語いが増えない
- 子どもの発言が文章として不完全でも、保護者が先回りをして理解してしまふ

*「VIEW21」小学版読者モニターへのアンケート結果から抜粋

● 表現力とは何か

言語や記号などで

自分の思いや考えを表出する力

——そもそも表現力はどのような力と捉え

るとよいのでしょうか。

八木 表現力は、自分の考えや気付きを、言語や記号などのさまざまな方法を使って、表に出す力といえるでしょう。身ぶり手ぶりなども表現の1つの方法といえますので、とても幅広く、定義は難しいと思います。表現する目的は、人との交流に加え、自分の思考を整理することもあると思います。

味村 社会生活における表現力と、教科学習における表現力は、少し異なると考えています。外に向けて発信するという点はどちらも同じですが、教科学習における表現は、表現をする前に自分で考えて整理することが多くなります。授業では、子どもがじっくり考えてから表現する場面を思い浮かべると分かるかと思えます。

八木 更に、表現力について考える上では、思考力との関係を捉える必要があります。新

課程においては、思考力と表現力は一体で補完関係にあることが読み取れます。表現という、分かりやすい発表の仕方やコミュニケーション方法などの技能をイメージするかもしれませんが、より思考を深めるための表現力と、技能としての表現力は分けて考える方がよいかもしれません。

味村 表現力は、「内容」「方法」「技能（スキル）」の3つの要素が深く関連していると思います。まず、自分が「内容」を理解していなければ表現できません。次に、どのような「方法」を用いると相手に伝わりやすいかを決める必要があります。例えば、「この数値は、数字で見せるよりも、グラフにした方が分かりやすい」といった判断です。そして、選んだ方法、この例ではグラフを作成する「技能」を習熟していることが求められます。

八木 確かにその3つがそろわなければ、相手に分かりやすく伝えるのは難しいでしょう。相手がどの程度理解しているかなどを踏まえて表現できるようになることが表現力といえるのではないのでしょうか。

●表現力はなぜ大切な

表現力が高まるに伴い
思考力も育つ

——表現力は、これからの社会を生きる上で特にどの場面が必要とされるのでしょうか。

味村 表現力を育てることはそのまま思考力を育てることであり、人間の成長に欠かせない教育です。また、自分の考えを発信し、相手の発信を受信するという行為は、コミュニケーションそのものです。意外と受信することの大切さは忘れられがちですが、表現力には、相手の考えを受け止めて返すことも含まれますから、発信力と共に受信力も高めていかななくてはなりません。特に、近年は価値観が多様化しているため、相手も自分と同じような考えとは限りません。グローバル社会の進展によって、多様な文化や価値観を持つ人々とコミュニケーションを取る機会も増えるでしょう。相手の話を聞き、理解する力も必要なのです。

八木 自分の話をするだけでは、誰にも受け入れられません。逆に、相手の言うことを何でも聞き入れる必要はありません。そうした相互関係を築く力も、これからの社会でますます重要になるでしょう。また、表現力が高まると、明確な根拠を示しながら話せるようになります。そうした力も、生きていく上で必須といえるでしょう。

●指導上の課題

教師がモデルを示すことで
良い表現が子どもたちにも広がる

——表現力を育むという観点で、これまで

の指導にはどこに課題があるのでしょうか。
味村 子どもの表現力を高めるために、授業で何をどのように表現させるのか、教師がもっと意識することが大切ではないでしょうか。そうすれば、子どもが発表をした時に、足りない部分は補い、適切な表現ならば認めて褒めることも出来ます。子どもがせっかくだと発言をしても、何にもせずに授業を進めてしまつと、良い表現の価値がクラスで共有されません。

八木 多くの教師が良い表現の基準を持っていないように思います。そのため、良い表現でも悪い表現でも、「よく出来ました」と発言したことだけを褒め、みんなで拍手して終わりとなつてしまつたのです。しかし、発言することが表現ではないのです。

教師が表現の評価基準を持っていれば、「この言い方は良かったね」「ここが抜けているよ」など評価や指摘を出来ます。それを聞いている周りの子どもも、「そう言えばよいのか」と表現の幅を広げられるでしょう。

また、答えを出して終えてしまつた授業でも、表現力は豊かになりません。どのようにして答えを導いたのか、その過程や根拠をしっかりと伝えることが、論理的な思考を伴った表現といえるでしょう。

味村 一斉指導で表現力を付けるのは難しいと考える先生もいるようですが、そこは工夫次第だと思います。良い発言を取り上げるこ

自ら表現したくなる授業づくり

とで、他の子どもの学びを促すのは、その一例といえるでしょう。

表現と思考は、互いに補完し合う関係にあります。表現すること、思考が広がったり深まったりすることがあります。表現することによって思考が、逆に、考えることによって表現が、一歩ずつ前に進んでいく授業を目指したいと考えています。

八木 その時に、伝えたいという気持ちが表現の原動力となることを忘れないでいただきたいと思います。表現が目的化し、形骸化してはいけません。「こうしたら解けた!」「自分はこう考えた!」などと、子どもが何かを伝えたいとする授業を心掛けていただきたいと思えます。「はじめに……」「次に……」といった表現の型を示す「話型」があります。これは、話し方の技術を身に付ける上では効果的です。しかし、子どもの考えが当てはまらないこともあるので、話す内容によって型を柔軟に変えていくことも大切です。

● 授業で表現力を育むには ①
問題解決の過程に考える場と表現する場を交互に設ける

——表現力を育てるにはどのような指導が求められるのか、具体的なヒントをいただけますか。

味村 まず、思考力と表現力は補完関係にあ

るため、表現力だけを育てようとはあまり意識しないことが大切だと考えます。本校の研究でも、思考力と表現力を相互に高め合う指導を目指しています。

例えば、授業に問題解決のプロセスを取り入れることによって、表現力や思考力の向上を図っています(図3)。流れを簡単に説明します。

最初に、①課題の把握があります。どの教科でも問題はノートに青枠で囲んで書くようにし、出発点となる問題意識を明確に持っているようにしています。問題提示の仕方によって子どもが取り組む姿勢は大きく変わりますか

ら、指導の工夫のしどころでもあります。

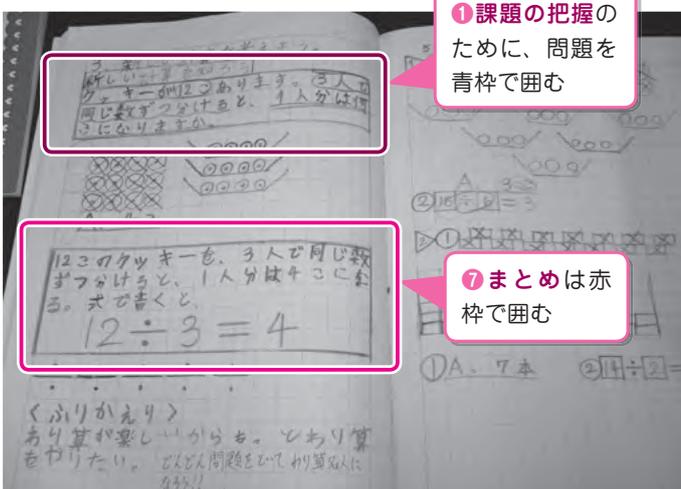
②解決の見通しは、既習事項などを確認し、「どのように解くか」を考える過程です。方法の見通しの時間を取ることで、次の③自力解決が出来やすくなる良があります。自分なりの見通しが不十分な場合は、解決できません。そこで、1人では進められない子どもには、教師が支援します。

続いて、④見直しです。自力解決までの思考過程を振り返って整理し、どのように説明すれば人に伝わりやすいかを考えるプロセスです。それまでの「個」による思考を、「集団」の思考に発展させる「つなぎの学習」として

図3 稲城第七小学校の問題解決型授業の流れ

- ① 課題の把握…(問題を青枠で囲む)
- 「個」の思考
- ② 解決の見通し…既習事項を確認するなどして解き方を考える
- ③ 自力解決…個々に問題に取り組む
- ④ 見直し…思考の過程を振り返り整理する
- 「集団」での思考
- ⑤ 発表・説明…考えを伝え合う
- ⑥ 検討…複数の考えや方法を比較・検討し、まとめあげる
- 「個」の思考
- ⑦ まとめ…(赤枠で囲む) 授業のまとめを記述する
- ⑧ 振り返り…授業全体を振り返り、気付きや感想を書く

* 稲城第七小学校の資料を基に編集部で作成



3年生の算数のノート。全教科・全学年でノートの取り方は共通化されている。慣れるに従って、自分なりの工夫をする子どもが出てくる

非常に重要です。

見直しの内容を踏まえ、**5 発表・説明**で考えを伝え合い、**6 検討**して共通性を見いだしたり、より簡便な方法を模索したりして、より良い考えを追究していきます。

そして、**7 まとめ**は学習した内容を赤枠で囲んで、授業全体の**8 振り返り**を行います。青枠と赤枠で囲むことによって、問題とまとめをそれぞれ明確にし、問題解決の流れを強く意識させていきます。

このような授業の展開によって、表現と思考を補完し合いながら、両方の力を高めていくのではないかと考えています。

八木 稲城第七小学校と一緒に研究に取り組んで13年度で4年目になりますが、特に重要だと思うのが**4 見直し**です。答えが合っているかどうかではなく、自分がどのように解いたのかを整理することには大きな価値があると思います。いったん振り返ることによって、思考が整理され、分かりやすく表現する準備が出来るからです。

味村 見直しによって、不要な言葉を削り、より伝わる言葉を足すことによって、必要な要素が整理されて表現しやすくなります。表現力や思考力を研さんする上では欠かせないプロセスです。このような授業づくりに取り組んでから、子どもが自分の思いや考えを表現することに抵抗がなくなり、自分なりに工夫してノートを取る子どもが増えました。

● 授業で表現力を育むには ②

基礎・基本の定着の上に表現したい気持ちが育つ

八木 もう一つ、指導のポイントとして挙げたいのは、基礎・基本が定着していないと表現したい気持ちにはならないということです。例えば、掛け算九九を習得していなければ、2桁の掛け算や割り算は出来ません。それと同じように、表現力や思考力を育てるためには、基礎・基本の知識・技能の習得を大前提として、普段の授業を充実させていかなくてはなりません。授業を通して「考えた、分かった、出来た、解けた!」という感動が、人に伝えたいくなる気持ちにつながり、そこに表現力が育つからです。公式を単に覚えるだけではなく、きちんと活用できるようにするまで定着させる必要があります。

味村 私は、学習内容を身に付けるためには、「出来て、分かって、活用できる」という3段階を経ることが必要だと考えています。つまり、「公式に当てはめて計算できる」だけでは十分ではなく、「どのように公式が成立しているかが分かる」、そして「新たな問題が出た時に活用できる」というプロセスを経てこそ、次の学習の根拠につながります。

八木 基礎・基本は机上の学習だけで習得するものではありません。関連する体験活動を楽しむことで知識・技能の習得はより確実な

ものになります。一例ですが、距離と時間から速さを計算する学習をした後、実際に校庭で30メートルを走ってタイムを測り、秒速を求めるといった活動をする、算数が苦手な子どもでも実感を伴って公式を理解していました。秒速の求め方を理解できた子どもが、次の授業で同じような問題を解けると、「自分で解けた」ことが、大きな喜びや自信につながります。

● 保護者との連携

会話の楽しさを実感させることが表現力の高まりにつながる

—— 表現力を育むために家庭への働き掛けなどで出来ることはあるでしょうか。

味村 語いを増やすことは、家庭と連携できると思います。豊かな表現力に、豊かな語いは欠かせません。仮に、3色しか知らなければ、他の色を言い表すことは出来ません。それと同じように、語いが豊富になれば、自分の考えや気持ちを豊かに表現できます。語いは普段の生活が大切ですから、保護者には家庭での会話を意識してほしいと協力を求めています。

八木 おっしゃる通り、語いは現象を凝縮したもので、増やすことで考える基礎を獲得していくという側面があります。家庭ではぜひ子どもと会話する場と時間を増やすように努

自ら表現したくなる授業づくり



力してほしいと思います。会話の内容は、学校での出来事やスポーツなど、子どもの好きなことで構いません。テレビを見ていても、「今の場面は良かったね」「分かりやすい説明だったね」などと、価値観を伝えて共有すれば、会話のきっかけになるでしょう。出来れば単語ではなく文章で、きちんと理由と共に伝えるような会話を心掛けてほしいと思います。特に、低学年の子どもは、興味があるこ

とをすぐに話したくて、時系列を無視して話すことがよくあります。そうした場合には、保護者が話を整理してあげるとよいでしょう。更に、子どもと話す時は、相づちを打つと共に、「それからどうなったの？」などと話を促し、よく聞いているという態度を示し、聞き上手になることも大切です。

大切なのは、コミュニケーションの楽しさを感じさせて、「話したら楽しかった」と思わせることです。心地よいことは繰り返しなくなるからです。もちろん、会話だけではなく、楽しかったことなどを書く機会を与えるのも良いことだと思います。

味村 他にも、粘り強さや諦めない気持ちなどが家庭で育つと思います。諦めずに取り組んだ問題がようやく解決できた時の喜びは格別で誰かに伝えたくなるものです。普段から保護者が「諦めずに頑張りなさい」と働き掛けることには大きな意味があると思います。

● 学校全体で取り組むために 1つの教科で研究したことを 学校全体に広げていく

—— 表現力を高める指導を取り入れるにあたり、校長先生をはじめ、管理職の先生方に心掛けていただきたいポイントはありますか。

八木 まず、表現力や思考力は生きていく上で重要な要素であることを、教師や保護者に

しっかり情報提供をしていたらいいと思います。教師や保護者一人ひとりの意識を高めることが、何より重要です。

しかし、理念だけで教育は変わりません。先生方の協力を得ながら、それを具体化していくことは管理職の先生方の大切な役割です。ただ、一気に全教科で取り組むのは難しいため、1つの教科で研究したことを学校全体に広げていくという進め方が良いのではないのでしょうか。

味村 楽しい授業をすると、子どもは表現しなくなるものです。分かったりうれしかったりしたら、誰かに伝えたくなるからです。もともと、表現力は感情や意欲との関連性が深いのでしよう。

先生が「書いてみよう」と言った時に、子どもが嫌がる授業は失敗と言えます。楽しい授業では、子どもには書きたいことが出てくるからです。また、担任や学年が変わるたびに学びの型が異なるとは、子どもは安心して学べません。私は、問題解決型の授業づくりを学校全体に浸透させることを、校長として強く意識しています。

八木 校長先生が自分の得意分野で授業をして先生方に見せることも、時には必要ではないでしょうか。目指す授業の方向性や教材を見る目を伝えたり、会話のきっかけになったりするでしよう。

—— 本日はありがとうございました。